

福祉系

対人援助職養成の

現場から<sup>④⑥</sup>

西川 友理

### 学生に教えてもらう事

1月のある日、卒業研究の締め切り間際。学生も必死ならこちらも必死です。指導、添削、議論、で連日ああでもないこうでもない、と言っていた時に、ふと目に飛び込んできた学生の卒業研究の一文。被虐待児に対するケアについての考えをまとめたものでした。

「(支援対象者が)社会的に「あるべき姿」ではなく、「ありのままの姿」でいられるようになることが、ケアの最終地点だと考える。」

…ちょっと感動してしまいました。

「…凄いですね。この言葉、何かに書いてあったの？」

「ううん、私がそう思ったんです。」

「そうかあ…！そらぁごめんなさい、あなたのオリジナルの言葉だったんですね。そらぁ凄いです！」

こういうことに出会うから、卒業研究はたまらなく面白いのです。学生から教えてもらうことが沢山あります。

## 主体性って何でしょう

引き続き、その学生は語ります。

「支援支援って言うけど、子どもだって無理やり助けていらんのちゃうか(助けてほしくないのではないか)と思うんですよ。だってそれって、誰がそのケースの主人公?って思うもん。助けることが支援の中心やなくて、その子どもの人生が中心でしょ。」

「そう、そうですね。」

「だけど、実際に制度の事をよく知っていたり、支援の方法を知っているのは支援者の方じゃないですか。だから、うーん、なんていうの、どうしても、支援者が中心にならざるを得ない。っていうか…。でもそれってなあ、どう整理したらいいのかなあ…」

頭を抱える学生です。

## 「利用者主体」「子ども主体」に

### 違和感が生まれ始めている?

今、保育者養成の現場で使われている教科書には、子どもの声を聴く、子どもの主体性を大切にする、と言うことが確かに盛んに書かれています。

しかし、上記のように学生たちはしっ

かりとその違和感を持ちます。「子ども主体」「利用者主体」と言いながら、養成校で教えられることの多くは「子どもに何を提供するか」「子どものために何をするか」ということであり、「ねらい」であり、「指導案」であり、「指導法」です。「私という保育者」は子どもとどういう関係性にあるのか、保育者論や保育原理で理論としては学びます。しかし、これをきちんと実践的に考える機会は、保育現場における実習くらいかもしれません。

ではその保育現場では「子ども主体」をどうとらえられているのでしょうか。

## 子どもに言うことを聞かせられること

「きちんと保育が出来るというのは、きちんと子どもに言うことを聞かせられる事。」

さすがに今時そのようなことを面と向かって言う教員や学生は少なくなりましたが、実際の現場では、その考え方が根強くあるように感じています。

もちろん、そうではない現場もあります。保育者同士が、そして何より子どもと保育者が対話を通じて日々を作っていくということを大切にされている園ももちろんあります。しかし、多くの保育現場で未だに暗黙のうちに「子どもが言うとおりに動いてくれるようになってはじめて保育者として一人前」という理解があるように感じています。何より実習巡回指導の場で、学生から「子どもが言うことを聞いてくれる方法を知り

たい」「子どもが思い通りに動いてくれるようにどうすればいいか、担任の先生に質問した」といった言葉を聞くことがあります。このことから、現場でどんな力が必要とされているのかを察することが出来てしまいます。

この現状において、「子ども主体」という考え方が、どうも実感を伴ったものとして感じられなくなってしまうというのは自然な感情ではないでしょうか。

かといって「子ども主体」である、ということは具体的に日々の保育の中でどのように動いていくことなのか、と考えると、これもまた難しいものです。子どもの言いなりになることではもちろんありません。

例えば幼い子どもに対するしつけに関すること。これについては、大人が圧倒的にルールを教える・伝える側になりやすく、環境を作る側になることです。トイレトレーニング、食事のマナー、挨拶、他者と一緒に過ごすこと、公共の場所での振る舞い…それぞれの子どもの主体を大切にしつつ、さて、何をどのようにかかわっていくことが「子ども主体」になるのでしょうか。

このようなことがあり、「子ども主体」について、どう考えたらいいのか。ずっと色々と考えてきたのですが、近年、思わぬ形でヒントを得ることがありました。それが OECD の「Education2030」です。

## OECD の「Education 2030」

OECD が 2015 年から進めているプロジェクト「Education2030」。これは、「VUCA」が急速に進展する世界に直面する中で、2030 年という近未来において子どもたちに求められるコンピテンシーと、その育成のための教育のありようを検討するものです。

VUCA (ブーカ) とは、V (Volatility : 変動性) U (Uncertainty : 不確実性) C (Complexity : 複雑性) A (Ambiguity : 曖昧性) の略語であり、先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態を指します。例えば昨今の環境問題、難民問題、食糧問題、エネルギー問題など、いま世界で起こっている様々な答えの出ていない問題がある状況を指しています。

OECD は、今後学校に入学する子どもたちには、「全人類の繁栄や持続可能性、ウェルビーイングに価値を置くことが求められるだろう。彼らは、分断よりも協働を、短期的な利益よりも持続可能性を大切にして、責任を負うとともに権限を持つ必要がある。「VUCA」(不安定、不確実、複雑、曖昧) が急速に進展する世界に直面する中で、教育の在り方次第で、直面している課題を解決することができるのか、それとも解決できずに敗れる事となるのかが変わってくる」としています。

**急に何の話か、と思われたでしょうが。**

急に大きな話になってきたな、と思われるでしょうが、もう少しお読みいただけるとありがたいです。

Education2030 には、非常に重要な概念として、エージェンシーと言う考え方が出てきます。これは「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と定義されています。これは、単に自分で考えたり、自分で行動したり、といったことをさしているわけではありません。エージェンシーは「他者や社会との関係性の中ではなくまれる」ということがポイントになります。「単に個々人がやりたいことをやることではなく、むしろ他者との相互のかかわりあいの中で、意思決定や行動を決め」ます。さらには「他者や社会との関係性があるからこそ、自分だけの考えに陥らないようにしたり、自らの行動を社会的な規範に照らして律するなど「責任」ある行動につながる」(白井 2020) とされています。

これは、この連載の 22 回目に「主体性」について書いた時に、私も感じていたことにも通じます。地域のお祭りでボランティアをしていた学生について、「その場にきた人々との相互の関係性の中から、どんどん新たな主体性が発揮される行動が見て取れ、それらは「お互いのやり取りができる社会関係の中で」行われていました。このやり取りの中で子どもと保護者、祭りのスタッフといった皆が主体的にいきいきと活動している状況がありました。主体性というもの、決して自分の中から自然に生まれてくるものではなく、誰かや何かとの相互のやり取りを通じて生まれ、また発

達していくものなのだなあということ強く感じた出来事でした。

上記 OECD のプロジェクトでは、「親や教師、コミュニティ、生徒同士の相互作用的、相互に支援しあうような関係性であって、共通の目標に向かう生徒の成長を支えるもの」で「教師や生徒が教えたり学んだりする過程において共同制作者となった時に」生まれるものを、「共同エージェンシー」と呼んでいます。世界各国のあらゆる中高生を交えたこのプロジェクトは、この関係性を、太陽を準えたモデルで表し、子どもと共に親や教師、コミュニティ、様々なものが「一緒に輝くときに、光は最も明るく輝く」としています。

同プロジェクトが 2018 年に出したポジションペーパーには、共同エージェンシーを「学習者が目指す目標に向かって進んでいくことを支える、双方向的で互恵的な協力関係のこと」とし、「この文脈では、誰もが学習者とみなされるのであり、それは生徒だけでなく、教師や学校管理職、保護者やコミュニティの人々も含むものである。」とされています。

大豆生田と無藤はこの共同エージェンシーを「社会の変革力」と捉え、これにアフォーダンス理論(人は探索しても(環境)の持つ価値(～できる＝アフォーダンス)を見つけ、行動するという理論)やナッジ理論(意図的に行動を起こさせるよう、環境や仕組み、情報提供を設計するための理論。強制ではなく、選択できるものであり、またそれが双方のプラスになることが条件とされている)を組み入れ、子どもだけでなく、子

どもに関わる親、教師、地域の人、あらゆる人々がそれぞれに学び合う行動主体、すなわち「共主体」であるという概念を提示しています。また、それぞれが関わる環境にあるモノやコトもアフォーダンスを持つ「主体」と考え、相互に関係するとしています。

この「共主体」の概念は「子どもの最善の利益」のために「子ども中心のカリキュラム」である園の活動と相容れないものではなく、むしろこれからの時代（VUCA が急速に進展する時代）に子どもと関わる者として必要とされる意識であるとしています。

保育者もまた、主体であるということ。保育者だけでなく、その周りに関わる皆が、主体であるということ。皆で協力して、よりよい社会を作っていくということ。この考え方は、「子ども主体」ではありつつも、あらゆる主体どうしの関係性の中で子供たちが育つという、大変ダイナミックな視点であると感じます。

特に保育分野では、よりよい社会を作るという事の第一歩として、よりよい日々の生活を作っていく、ということが重要になるのではないかと考えます。よりよい生活を作る一員として、関係性の中でともに協同する中で、子どもも大人も、個々の成長がなされていくのです。

「子ども主体」という言葉とそれにそぐわない保育の現状。ここに「共主体」という概念で「周りの大人も主体である」という考えを入れ、その上で、軸足は「子どもの最善の利益」から外さない、というスタンスをとることで、ずいぶんすっきりと地に足がついた考え方にな

ったと感じました。

## 共に生活を作っていく

### 仲間としての子どもと大人

この連載の第 27 回でも、主体性について悩む学生とその卒業後について書きました。

教科書にも、保育所保育指針にも、“子どもの主体性が大切”と書かれているにもかかわらず、保育者が作った指導案、保育者の意図に沿った計画に、どうすれば子どもがノッてくれるのか考えるという保育のプロセス。さらには思い通りにいかない時に焦る自分。

「そのどこに“子どもの主体性”があるのかなあって思うんです。」

そう言っていた学生が、卒業後保育園の先生として就職し、のちにこのように言っていました。

「思い通りにいかない、なんて当たり前じゃないですか！そんな時は、思ったよりずっとよくなったらいいだけやん、って思うんです。だから、子どもの思いに寄り添って、子どもに任せてしまいます。子どもが夢中になって、自分のやりたいことをしている時って、本当に生き生きしてて、凄いですよ！」

とても楽しそうに語っていました。

思い通りにいかない、ということをもっと楽しむ保育者の姿がありました。

## 共主体の保育は

### 皆でともに生きるということ

佐伯胖は「ともに生きる保育」という言葉で自らの理想とする保育を描き出しています。子ども同士、子どもと保育者、保育者同士、保育者たちと子どもたちと保護者達、そしてなにより世の中の文化の実践者たちと、ともに生きる保育です。またそれは対話の保育であるとしています。相手を「自分と同じ」とみなすのではなく、相手は永遠に「未知」であり、だからこそ対話を通して、常に「意外な一面」、「思ってもいなかったこと」を発見し、おどろき、そしてそのことを喜び、それをお互い「交わす」（佐伯胖 2001）。今から 20 年も前に、このように書き表しています。

さらには幼児教育の父と言われる倉橋惣三も、その著『育ての心』において「育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である。」と述べています。これは 1936 年、実に昭和 11 年の本の中にある言葉です。

「共主体」の姿勢は何も特別な新しい概念というわけではなく、子どもを一人の人間として尊重する保育者や、対話を大切にする保育者にとっては、今まで当たり前のようにやってきたことだと思うのです。

子ども“に”話をするというより、子ども“と”話をするを大切にする保育者は、実は現場には結構沢山います。そんな保育者の皆さんが楽しく機嫌よ

く働ける園の環境整備が大切だと思うのです。

子ども達を何とかしよう、子ども達にどう教えよう、を中心に据え、職員がめざす姿を追い求めていくと、最終的には職員自体がジレンマに陥って、苦しくなってしまう。子ども主体のカリキュラムは、子どものために行うものではなく、子どもと共に行うものです。そしてそれらは生活の中で行われていきます。

今後の保育現場は、生活を共に作っていく仲間として、従来の「子ども—大人」モデルという枠組みを超えた関係性のあり方について、園がどこまで自覚的になれるのか、ということがポイントになっていくのではないのでしょうか。

### 最近の対人援助分野の傾向、

#### かもしれない。

それにしても、対人援助や社会福祉の現場では、この共主体という概念をはじめ、伴走型支援や、地域共生社会などといった、人を「支援される側」「支援する側」と明確に固定することに疑問を呈する動きがここ 10 年くらい、本当に表立ってきているように感じます。

あまりにも社会が分断され、常識が超高速で変化し、自分で物事を考えても明確な正解はない、まさに VUCA が急速に進展する世の中で、無条件で頼りになるような知識・技術は今までよりもずっと少なくなるのかもしれない。

対人援助分野にいる人は今、新しい知識や新しい技術を広げる事よりも、あらためて「専門性とは何か、支援者とはどういう人を指しているのか」と自分の足元を見つめなおして、深めていきたいと思っていることが、この固定された役割期待への反発という傾向に表れているのではないかと感じています。

.....

## 引用・参考文献

1) 白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』ミネルヴァ書房 2020年 P86, P93

2) 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室『教育とスキルの未来: Education 2030【仮訳(案)】』  
[https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf)

3) 大豆生田啓友 無藤隆「子どもと大人が学び合う「子ども主体」から「共主体」の保育へ」『新幼児と保育 2020年4/5月号』小学館 2020年

4) 佐伯胖『幼児教育へのいざない 円熟した保育者になるために 増補改訂版』東京大学出版 2014年1月 P183  
(引用部分は2001年に書かれたもの)

5) 倉橋惣三『倉橋惣三文庫3 育ての心(上)』フレーベル館 2008年 P3